

東京学芸大学附属小金井小学校

研究テーマ：自然と向き合い、知を更新し、探求し続けようとする子

1. 問題意識

今年度は新型コロナウイルスの影響で今まで通りの生活様式に困難が生じた。日々の新規感染者数に一喜一憂し、いつ罹患するかわからない不安。おそらくほとんどの社会人が、自分の属するコミュニティ内でいかに感染が起きないように考え、様々な手立てを講じてきたと思う。しかし、その手立てに根付く根拠は何か、根拠となった情報はどこから出されたものなのか。情報に翻弄され、事実と解釈の大切さを再実感した人も多いことだろう。判断の妥当性を自分の力で見出していこうとする力こそ、理科で学習する問題解決のプロセスの必然性と考える。しかし、問題解決のプロセスに沿って授業が進んではいるが、児童一人一人に目を向けると、「問題設定の場面で、問題文を自分事として捉えていない」や「実験や観察を楽しんではいるが、その活動をなぜ取り組んでいるのかかわかっていない」など問題解決の形骸化された様子が見受けられる。また、理科の授業にとどまらず、教科の特質の「見方・考え方」を働かせ、授業外の学びに目を向けたり、身に付けた問題解決の力を日常生活に活かしたりすることがこれからの予測困難な時代に立ち向かう人を育成する上で重要であると考えます。

新学習指導要領が完全実施となり、「指導と評価の一体化」の重要性が求められている。学習が児童を評価するためのものだけでなく、児童の学習改善、教師の授業改善のための材料として評価をとらえ、理科部の目指す知を更新しようとする児童、探究し続ける児童を育成していきたい。

2. 今年度の研究「こえる学びの拡張」について

本校では、昨年度まで「こえる学び」を生み出す環境デザインについて研究を進めてきた。そして、今年度は、それをさらに拡げていく「こえる学びの拡張」について研究してきた。

①問題解決の力を学校生活に転移させる姿（実践の拡張）

本研究テーマである「こえる学びの拡張」は、これまで行ってきた45分の授業研究だけでは変容を見取することは難しい。理科で育成した問題解決の力を、他の学習や生活の場で発揮する姿を見取るようにしたい。自分自身に関わる「問題」について、自分なりに調べたり、事実と解釈を分けて考えたり、理論立てて説明したり、活動を省察したりするような、理科で獲得した問題解決に向けた方略を他教科、生活等で実践できる子を願う。

②事象の本質を捉える「見方・考え方」（没頭の拡張／自然と向き合い探究し続ける子）

理科では、各領域に応じて主に働かせる「見方・考え方」が明記されている。これは理科を学ぶ上で、本質的な意義の中核をなすものであり、教科の学習と社会をつなぐもの、児童が学習や人生において自在に働かせられるようにするものである。ただ事象と出会っただけでは本質を捉える見方・考え方には辿りつかない。教師側が学習環境デザインによる提示によって、事象の本質を見方・考え方で捉えていく姿は問題の深化、没頭の拡張及び探究し続ける姿につながるだろう。

③往還の拡張～自分事として知識を獲得する～（往還の拡張）

自分事として問題を捉え、知識を獲得した際、学びの振り返りに授業の外まで考えを広げて書いているのか、授業の中だけで知識が終結しているのかでは理解に大きな違いがある。児童一人一人が学んだことを価値付けて、自分に置き換えて判断し表現できるような場面を設定する。また、学んだこと基にしながら、再度自分の生活を振り返り、見直したり判断し直してみたりすることで、新しい価値を見出せるようにする。